九州産業大学国際文化学部紀要　第11号　85—102（1998）

プロシムナのミケーネ墓崇拝とヘライオン

——ギリシア暗黒時代のアルゴリスに関する一考察——

安　永　信　二

（1998年1月21日受理）

I　序

ミケーネ文明が崩壊した前12世紀以降，およそ4世紀にわたってギリシアは暗黒時代を経験した。しかし前8世紀になると，フルファベットの使用，祭祀の復活，人口の増加，ポリスの発生，植民活動，英雄叙事詩の流行，オリンピア競技の開始など，「ギリシア＝ルネサンス」[1]と呼ばれる文化復興の時期を迎えたのである。

ミケーネ時代の墓に奉納品が捧げられるようになったのも，これらとほぼ同じ時期であった。前8世紀後半から，コリント近くのガラタキ，メッセニア地方のククナラ，ニホリア，ヴォリミディア，アノ＝エングリアノス，アッティカのメニディ，トリコス，エレウシス，アルゴリスのアシーネ，ミケーネ，プロシムナなど，ギリシア各地に点在するミケーネ時代のトロス墓や岩室墓（chamber tomb）に，土器や青銅製品，それにテラコッタ小像などを奉納する風習が広まったのである[2]。

こうしたミケーネ墓崇拝の風習については，さまざまな解釈が試られているが，それらを大きく分類すると，(1)ミケーネ時代から連続する風習，(2)ホメロスの叙事詩の影響を受けて生じた活動，(3)社会の変化，とくにポリスの発生と関連した事象，の3つに分けられよう。

(1)の学説には，Fahnell，Hack，Blegen，Nilsson[3]，Nagy ら，主に今世紀前半に活躍した研究者たちが含まれる。Fahnell はこの祭祀活動はミケーネ時代から連続する活動で，トロヤ戦争に参加した武将たちは，死後，英雄あるいは神として尊崇されていた，しかしこれとは別に先祖を崇拝する風習も行われていた，その後英雄叙事詩の流行に伴い，これらが英雄崇拝となったと考えている[4]。Hack もこれとほぼ同じ考えを持っているが，彼は死者の祭祀が叙事詩の影響を受けて英雄崇拝に発展したものだと解している[5]。これらに対し，Nagy はポリスの成立と絡めた。彼は Rhode の説に則って先祖崇拝のミケーネ時代からの連続性を認めるが，ポリス成立の過程で高度

に発展して英雄崇拝に変化したものだと主張している[6]。

このように，英雄崇拝をミケーネ時代から続いた風習であることを前提とする研究者は多いが，第一にミケーネ時代には一時的な死者の供養はなされたが，永続する先祖崇拝は行われていなかったこと，第二に前8世紀半ば以前にミケーネ墓崇拝が行われた形跡はないことが認められるにいたって[7]，連続性を主張する意見は少なくなってきている。

(2)の考えは，すでにFahnellやHack，あるいはミケーネのアガメムノネイオン(アガメムノンの英雄廟)を調査したCookによって出されていたが[8]，Coldstreamはこれをさらに強く唱えた。彼は英雄叙事詩の影響を主張すると同時に，地域による違いも指摘した。すなわち，ミケーネ時代と鉄器時代とでは墓制が大きく変化したところが多く，アッティカ，ボイオティア，コリント，アルゴリスなどでは青銅器時代末期にすでに変化が生じ，個人墓が流行していた。これらの地域ではホメロスの叙事詩に影響を受けた住民が，驚きと尊敬の念をもって巨大なミケーネ墓に接し，英雄崇拝が

〔図1〕 ギリシア各地のミケーネ墓崇拝
(　)は前7世紀以降の奉納・崇拝，ミケーネ墓の再利用，および墓崇拝かどうか判断できない所

始まった。しかし，テッサリア，ラコニア，アカイア，ロドス，クレタなどの地域では墓制に連続性があるため，ミケーネ墓は不自然ではなく，英雄崇拝は起こっていない。また，民族移動がなかった地域では，たとえばアテナイのエレクテウスとアカデーモス，またイタカのオデュッセウスなどの英雄のように，ホメロス以前から暗黒時代を通じて英雄崇拝が継続していたという結論を出した[9]。

叙事詩の影響による英雄崇拝の流行という考えは，Hadzisteliou-Price によって疑問視されていたが[10]，さらに Snodgrass は Coldstream の説を痛烈に批判し[11]，(2)の説を支持する意見はその後現れていない。

これらに代わって(3)のミケーネ墓崇拝と社会変化を関連させようとする捉え方が，近年提唱されるようになってきた。Snodgrass は[12]，前 9 世紀から前 8 世紀に大きな社会変動が生じたことを前提に論を進めている。ギリシア世界はこの時期，牧畜社会から農耕社会へと変化し，たとえばアッティカが前780年から前720年の間に 7 倍に増えたように，人口も急激に増加した[13]。それゆえ農地の開拓が進められるとともに土地所有の観念が発生し，先祖代々の土地であることを証明する手段として，ミケーネ墓での祭祀が始まった。そして彼は，これらのミケーネ墓崇拝は，アッティカ，ボイオティア，フォキス，アルゴリス，メッセニアで行われ，こうした地域では自由な農民の権利を守るべく機能したと考えた。Whitley は，この考えに真っ向から反対した。彼は，まずアッティカとアルゴリスでは英雄崇拝をめぐる社会的状況は異なっていることを指摘し，アッティカで墓崇拝を行ったのは自由な農民ではなく，古くから居た者たちが英雄時代からの土着であったことを証明するための行為で，アテナイを中心とする全アッティカに対する権威の伸張に敵対する風習であると論じた[14]。彼の意見は，Polignac や Morris が主張するところとほぼ同じであり，後者は彼と同じく，成立しつつあるポリスに対抗すべく暗黒時代に特権階級だった貴族勢力が自らの優位を示すためのもの[15]，また Polignac はポリス成立過程における貴族同士の対立関係から生じた一過性の現象であると考えている[16]。

当時の社会変化と一部連関させながらも，墓崇拝は先祖崇拝がその根底にあるとする研究者が最近になって現れた。墓崇拝および英雄崇拝について，精力的な研究を続けている Antonaccio[17]である。彼女は，暗黒時代末期からアルカイック期にかけてのギリシア各地におけるすべての崇拝行為について再検討を行った。そして，それまで混同されることの多かった墓崇拝（これにはミケーネ墓崇拝と同時代墓に対する崇拝が含まれる）と英雄崇拝を峻別した上で論を進め，墓崇拝の起源と背景は地域によって異なっており[18]，たとえばアルゴリスではポリス成立過程の現象の一つとして捉えられるが[19]，ミケーネ墓と同時代墓に対する崇拝のどちらも死者と生者の結びつきを

表しているとした。また英雄崇拝は，スパルタのメネライオンを除き，ほとんどすべてがアルカイック期以降－従来考えられていたよりもずっと後の時期－に始まるものであると結論している[20]。

以上のように，ミケーネ墓崇拝について，(1)と(2)の見解はほぼ否定されている。そして(3)の視点である，前8世紀の社会変化との係わりから捉えようとする見方が主流になっているが，いかなる変化の中で墓崇拝を捉えるかについては，決定的な解釈は出されていない[21]。

そこで本稿では，出土史料が比較的豊富なプロシムナのミケーネ墓崇拝を例にとり，その風習がいかなる性格のものであったのかを，また同地の隣りに位置するヘライオン（ヘーラー女神の神域）およびアルゴスとの関係を見ることによって，「ギリシア＝ルネサンス」理解の手がかりを得たいと考えている。

II　プロシムナのミケーネ墓崇拝

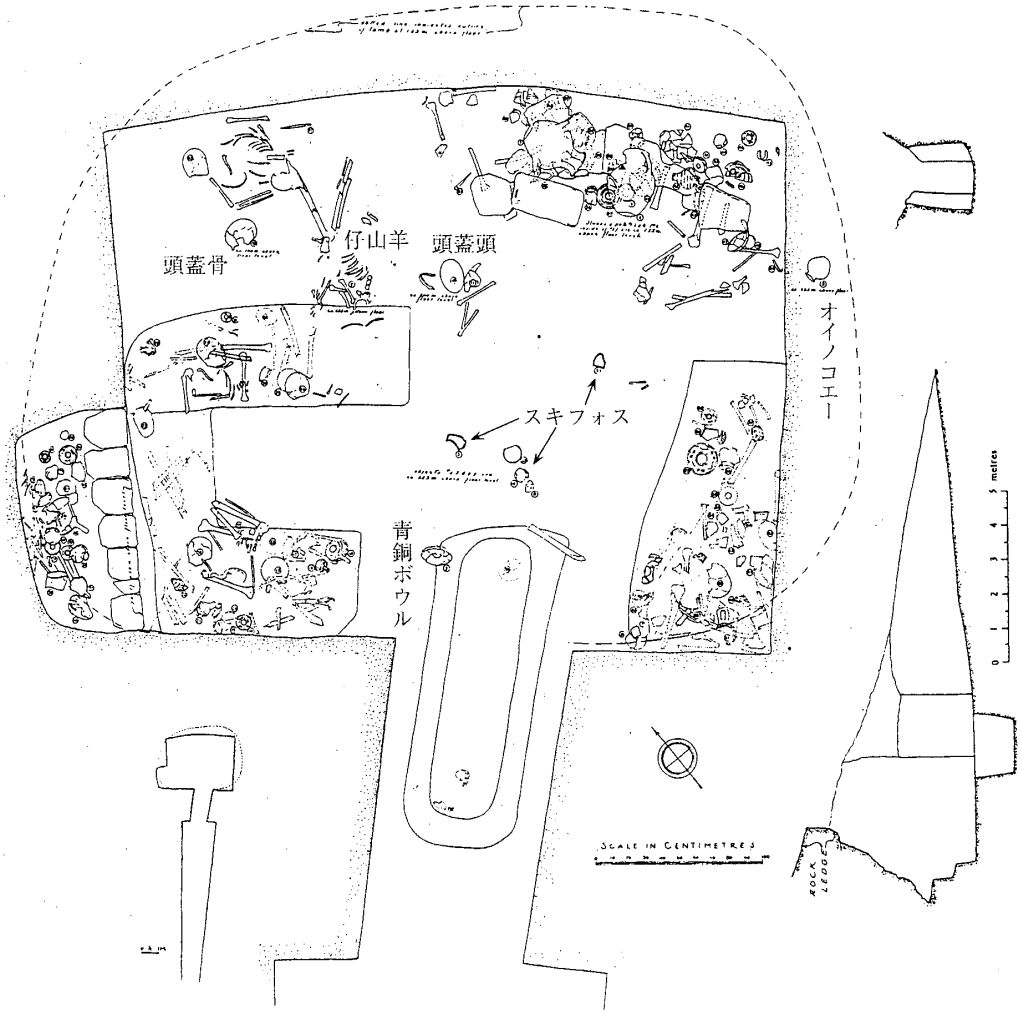
サモスと並んで古代ギリシア世界ではヘーラー信仰の中心として有名だったアルゴスのヘライオンは，アルゴリス平野を一望するエウボイア山（標高532m）の山麓に位置している。プロシムナはこのヘライオンに隣接し，新石器時代からの痕跡を残すが，青銅器時代は主に墓地として利用されていた。ここに広がるミケーネ墓群は，1925年から28年にかけてアメリカの考古学者 Blegen によって調査された[22]。彼はＭＨ期（中期ヘラディック期：前2000年ごろ～前1575年ごろ）の石棺墓33基と，ＬＨ期（後期ヘラディック期＝ミケーネ時代：前1575年ごろ～前1100年ごろ）の岩室墓53基の発掘・調査を行い，15基の岩室墓から後代の物を発見した。これらのうち，Tomb III と TombXIIIはそれぞれ前4世紀とヘレニズム期の物が出土したが，残る13基からの出土品は前8世紀後半から前7世紀にかけての奉納品と思われる物であった。その出土状況は，二，三の例を挙げれば，つぎにようになっている。

Tomb XL[23]　この岩室墓は，ヘライオンのほぼ真西に位置するケファラリと呼ばれる山の中腹に作られた墓群の１つである。ほぼ５ｍの長さのドロモス（羨道：地表から玄室にいたる通路）は途中から急勾配に下っていき，現在の地表面から1.9mの深さに玄室の入口がある。内部はほぼ四角形で，奥行き約1.75m，幅2.30～2.52m，高さ約1.80mの，この地域の岩室墓としてはやや小振りの墓である。天蓋は崩落していないが，かなり古い時期に楣（マグサ）石（玄室入口の上に水平に渡した岩）が落下していたため，玄室への出入りは可能な状態にあった。玄室床面の南東隅に置かれた岩でできた棺の内部には１体分の遺骨が入れられており，南側壁面に沿って遺骨１体と副葬品

がまとめられていた。奇妙なことに中央部に遺骨や副葬品はほとんどなく，北側におそらく最も後に埋葬されたと思われる遺骨の一部（骨２本）が壺とともに残されているだけであった。これらはミケーネ時代の遺骨と副葬品であるが，以後この上に土砂が堆積し，床面から１～1.60mの地層には前８世紀終わりから前７世紀初めの物と思われる，青銅のボウルとピン，スキフォスを含む原コリント様式の多数の土器片，コリント様式の小さな壺が発見された。

Tomb XXXIV[24]　ドロモスの長さが9.50m，玄室は奥行きが3.05m，幅が3.90mの，ほぼ長方形をしたやや大型の岩室墓である。天蓋の大半が早い時期に崩壊し，内部は土砂で埋まっていた。床面はすべてミケーネ時代の遺骨と副葬品であるが，床面の上1.25mの地層から後代の物，すなわち玄室東端で大型の壺が２つ（１つの壺の中に小さなカップが１つ），中央部では小さな水差しとスキフォス，砕けた青銅のディスクとボウル，玄室外の地点で小さなオイノコエーが出土した。このうち，オイノコエーはジオメトリック（幾何学様式）期の，またスキフォスは典型的な原コリント様式であることから，これらすべてが遅くとも前８世紀末に属するとBlegenは判断している。また，同じ層から仔山羊の骨が出ているが，ほぼ骨格通りになっているため，犠牲として捧げられたのではなく，天蓋が崩落してできた穴に落ちて死んだものと思われる。一方，仔山羊の骨の近くおよび西側に少し離れたところに，人間の頭蓋骨が２つ発見された。頭蓋骨が単独に存在する理由は説明できないが，他の部分の骨がまったく出土してないため，通常の埋葬でないことは明らかである[25]。したがって，この層から出てきた出土品は，仔山羊の骨と人間の頭蓋骨とは無関係であり，奉納目的で置かれたものと考えてよかろう。

前700年前後の物がプロシムナのミケーネ墓に置かれた理由についても，学説は一致していない。発掘者Blegenは，近くのヘライオンに捧げられた奉納品がプロシムナに捨てられたか，あるいはミケーネ時代に埋葬された者たちの子孫が行った死者の祭祀のどちらかであると考えた[26]。しかし，Häggはこれらは前８世紀末の人間が，古い時代の墓に葬られている英雄たちに捧げた奉納品であると断言し，Blegenの第一の可能性を否定している[27]。Whitleyは，この風習が英雄崇拝であることも十分に考えられるとした上で，プロシムナおよびヘライオンはアルゴスにとって領域の境界を示す郊外神域であり，かつ奉納は中心市と周辺地域の結びつきを強化するために行われた政治的な意図を持つ行為であるとした[28]。一方Wrightは，ヘライオン古神殿の大テラスに関する論文の中で，プロシムナのミケーネ墓崇拝がヘライオンにおけるヘーラー信仰と大きな係わりを持っていたと考えている。彼の意見を要約するとつぎのようにな



〔**図 2**〕 Tomb XXXIV (Blegen *Prosymna* II Plan 19)

る。アルゴスはティリンスなど近隣の諸ポリスと抗争していたが，ミケーネやティリンスのように‘古代(ミケーネ時代)’のモニュメンタルな城砦王宮を持たなかった。また『イーリアス』の中で，アルゴスの英雄たちの守護神はヘーラーであるとされているため，アルゴスは英雄たちの居住地にヘーラー神域を作る必要があった。そこで，彼らはミケーネなどの城壁に対抗すべく，キュクロペス式を擬した巨石による壮大な建築物－ヘーラー古神殿の大テラス－を造営した。それゆえプロシムナのミケーネ墓は，古代の英雄たちの墓とみなされており，ヘライオン建立の触媒作用を果たしたのである[29]。以上のように Wright は，アルゴリスにおけるポリス成立を示唆し，墓崇拝を覇権抗争と係わりを持たせて考察している。Antonaccio も同じくアルゴリス内の覇権抗争を想定しているが，彼女はポリス成立以前の共同体同士の争いだとした上で，アルゴスはミケーネと，両者の中間に位置するプロシムナの領有をめぐって対立しており，前者は先史時代の先祖と血縁的なつながりを求めてミケーネ墓での奉納活動を行うようになったと解釈している[30]。

このように，プロシムナでのミケーネ墓崇拝も前8世紀後半に始まる社会変化の中で捉えられるようになってきているが，そのすべてが古代の英雄あるいは先祖とのつながりを求めた活動であることを前提としている。しかし，この時期のミケーネ墓への奉納は次に述べるような，後代の英雄崇拝とは明らかに性格が異なっている。

前476/5年にデルポイはアテナイに対して，テセウスの骨を持ち帰って恭しく祀るようにと託宣を下したが，キモンはテセウスが殺された伝承の残るスキロス島を占領し，棺とその側にあった青銅の槍と剣を発見した。彼はこれらを三段橈船に乗せてアテナイに運び，ギムナシオンの傍らに葬り直したという（Plutarchos *Kimon* 8；*Theseus* 36)。また，テゲアに苦杯を嘗めていたスパルタは，デルポイの託宣通り，アガメムノンの子オレステスの遺骨を捜し出して持ち帰っている(Herodotos Ⅰ 67-8)。一方，スパルタのメネライオンでは，遺骨がその中にないにもかかわらず，メネラオスとヘレネが葬られている墓所として祭祀行為が行われていた[31]。このように英雄崇拝は，遺骨自体もしくは遺骨が安置されている（と信じられている）廟がその対象とされていたのである。

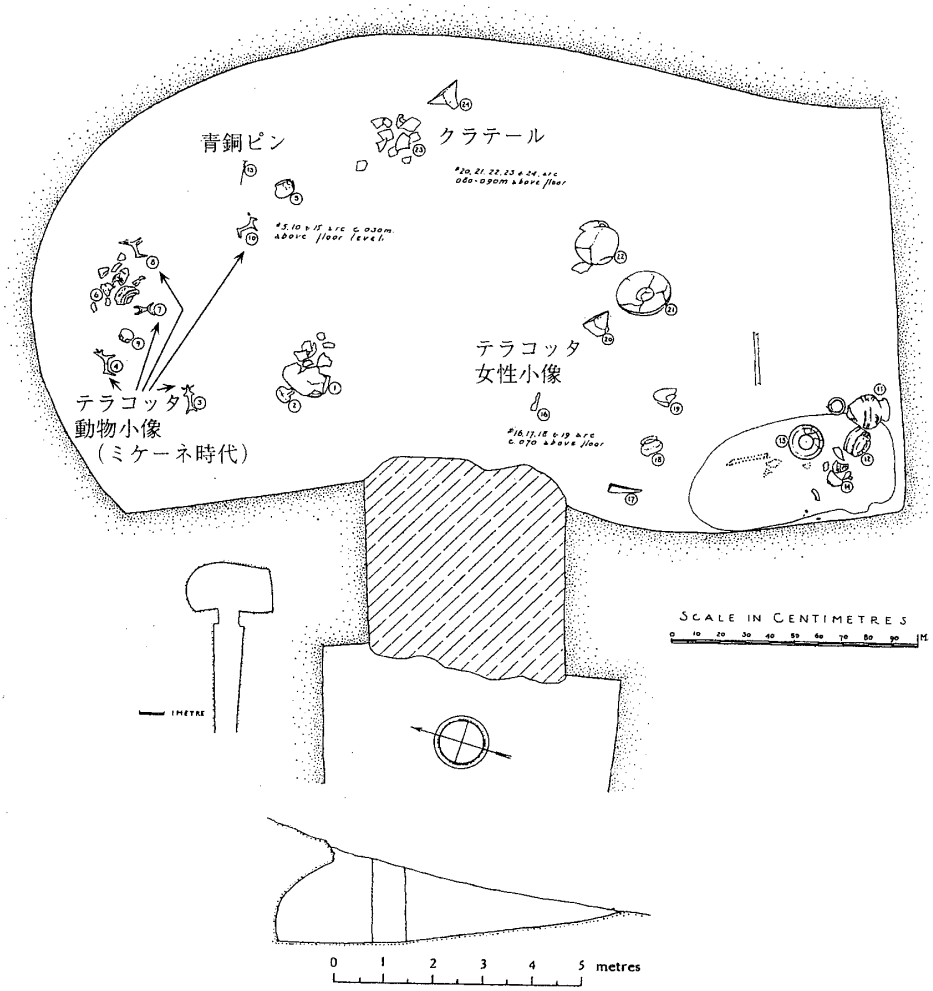
ところがプロシムナでは，遺骨に対する畏怖や尊敬の念をまったく読み取ることができない。彼らは，ミケーネ墓の被葬者とは無関係に奉納品を捧げたのであった。Tomb IXと TombXIXは，まさにこれを示している。

Tomb IX[32]　長さ5.25mのドロモスからミケーネ時代のキリクスの脚部分が5つ，またジオメトリック期の物と思われる土器片が見つかっている。玄室は不規則な形で，最深部までの奥行きが3.21m，幅3mの大きさで，天蓋の大半は崩落していた。玄室入口の石でできたドアが壊れずにいたため，発掘も上から行われたが，床面から1mの層に赤色無装飾のポットを含むいくつかの土器片以外，堆積していた土砂からは遺物は発見されていない。そして床面に残されていたのは，青銅のヘソつきフィアレが2つ，カップ，4つの指輪，留め金，2本のピン，ビーズ，また鉛の指輪，鉄のかけら，テラコッタの糸巻きなどほとんどがジオメトリック期のものであった。同時にミケーネ時代と思われるステアタイトのボタン等と，人間の大腿骨が1本発見されている。また玄室の奥にある壁龕(ガン)部には，厚さ0.20mの焦土層があり，Blegen はジオメトリック期にここで供犠が行われたと解している[33]。

この発掘結果を見てわかるように，ジオメトリック期の人々は壊れた天蓋からこの墓に入り，すでに積もっていた土砂を取り除いた上で奉納と祭祀を執り行ったのである。彼らは土砂を掻き出した時に，間違いなくミケーネ時代の遺骨と副葬品も排除した。つまり，この穴が墓であることを知っていたことに疑いはない。しかし，彼らは遺骨を顧みることなしに，墓に対する奉納を行ったのである。

Tomb XIX[34]　この墓の玄室は奥行き1.80m，幅3.46mで，右側面は直線，奥面と左側面は弧を描いた不規則な形している。玄室入口のドアは，おそらくジオメトリック期のうちに上半分が取り除かれ，ここから出入りが可能となっていた。Tomb IXと同じく，ミケーネ時代の遺骨と副葬品はわずかに残るだけで，床面から0.3〜0.9mの層からジオメトリック期の奉納品が発見された。さらに詳細に見ると，この層の3つの部分に出土品が分散している。床面から0.30m上の層には，ミケーネ時代の動物小像とともにジオメトリック期の青銅ピンと小さな水差し，0.70mの層からはテラコッタ女性座像，0.80〜0.90mの層からはクラテールの破片や青銅ボウルなどが出土した。

もし，地層が故意に乱されたものでないとすれば，つぎのような過程で奉納品が捧げられたことは明らかである。ジオメトリック期のある時にドアの上部からミケーネ時代の遺骨や副葬品の大半が持ち出されたが，床面までのすべての土砂を排出することはなかった。この時，青銅のピンや水差しが置かれたが，しばらく放置され，女性



〔図3〕 Tomb XIX (Blegen *Prosymna* II Plan 5)

座像が奉納，さらに中断をおいて再度クラテールやボウルが捧げられた。Tomb IXと同じく，この墓でもミケーネ時代の遺骨は無視され，奉納品のみが置かれたのであった。また，女性座像は，ヘライオン出土のヘーラー女神像とほとんど形状が似ており[35]，この墓にヘライオンと同じ目的で奉納品が置かれたことの証拠となるものである。

先に挙げたTombXLとTombXXXIVは，床面まで掘り下げられることなく，堆積した土砂の上に奉納品が置かれていた。ジオメトリック期の人間は，古代の遺骨がその下に眠っていることを確認しないまま，奉納を行ったのである。これまでの4つの墓のみならず，13基すべての奉納品が，ミケーネ時代の遺骨に対して捧げられたものではなく，また自らの墓としてこれらを再利用することもなかった。彼らはミケーネ墓が古代人の墓であることを知りながら，そこで発見した遺骨を英雄あるいは先祖のものとして認識せず，墓のみを奉納の対象として見ていたのである。では，なぜ遺骨ではなく，墓を崇拝したのだろうか。この理由は簡単である。彼らの関心が，墓そのものに向けられたからである。

前述したように，プロシムナではＬＨ期に作られた岩室墓以外にもＭＨ期の石棺墓が33基発見されている[36]。石棺墓の大きさは長さが0.72～1.76mで平均が1.21m，幅は0.31～1.00mで平均は0.60m，また石棺自体の深さは0.5m弱で，ほとんどが地表面から１m以内の場所に埋められていた。これらの石棺墓は，トロス墓や岩室墓に比べるとはるかに規模は小さい。これらの中には地表から数センチ下に蓋石があるものもいくつかあり，さらに岩室墓のドロモスに墓の一部が飛び出しているもの，それどころか蓋石が地表に突き出ているものすらあった。副葬品が納められた墓も多く，大半が土器，青銅のイヤリングや腕輪，貝殻（および貝で作られたネックレス）等であったが，岩室墓TombXVのドロモス発掘時に見つかったGrave IVでは青銅の短剣と象牙の柄が出土している。

さて，ＭＨ期の石棺墓には埋葬された後に祭祀が行われた形跡を持つものもあるが，すべて埋葬直後であり，青銅器時代以降の奉納・祭祀の痕跡は一切見られない[37]。これらの石棺墓は，見つかりやすい地表面近くにあり，あるいはすでに蓋石が露出していたものもあったに違いない[38]。ところが，ジオメトリック期の人間はこれらを一顧だにすることなく，岩室墓のみに奉納品を捧げたのであった。すなわち当時の人間は，石棺墓と岩室墓に安置された遺骨が，古代の人間のものであることを知っていたにもかかわらず，遺骨とは無関係に，岩室墓を祭祀の対象としたのである。このように，彼らは古代人の遺骨にではなく，墓に対して関心を抱き，奉納したのであった。そして彼らが興味を持ったのは，自分たちのそれとほぼ同じ大きさのＭＨ期の石棺墓とは

違う，規模の大きな岩室墓だったのである。この事実は，トロス墓近くに作られた小テラスと，ヘライオンに築かれた古神殿の大テラスにまさしく象徴されている。

III　トロス墓近くの小テラスとヘライオンの大テラス

プロシムナに存在する唯一のトロス墓の北西約75mの場所に，南東から北西方向に長さ12.50m，幅8.50m，高さ約2mのテラスがBlegenの調査で発見された(39)。テラスのほぼ中央には，直径約1.2m，厚さ0.2mの不規則な形の焦土層が堆積しており，ここから青銅や鉄の欠片，原コリント式の土器片等が出土している。また，テラスの周囲からは夥しい数と量の奉納品が発見された。原料別に簡単にまとめると，つぎの通りである。

〔銀〕指輪

〔青銅〕ピン，指輪，鏡，スフィンクスや鷲をかたどった飾り板，ヘソつきフィアレ等

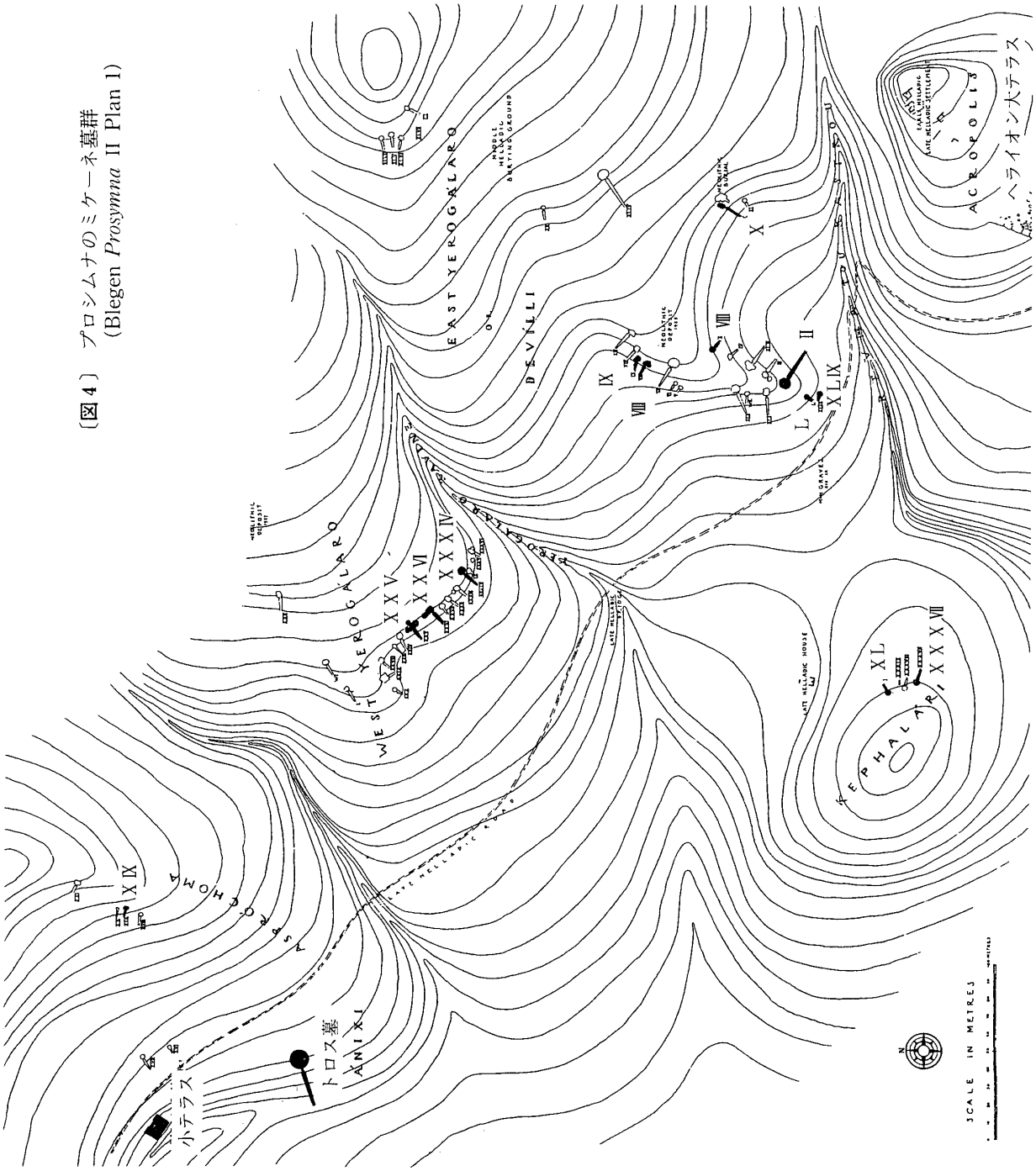
〔テラコッタ〕多くの女性像，戦士騎馬像，糸巻き等

〔土器片〕(きわめて大量)最下層からジオメトリック期の土器片，しかし大半が原コリント式，わずかにコリント式，古典期，ヘレニズム期のものも含まれる

また，有名な青銅の打ち出し細工も見つかった。これは一部破損しているが，現存するのは0.5㎜厚，0.463m高，0.169〜0.180m幅の，前7世紀前半の椅子脚につける覆いだと考えられているものである。上下にレリーフがあり，上は戦士と女性，下は2人の女性が描かれている。下側左の女性が短剣で右の女性を刺している図柄であるため，上はカッサンドラを連れて凱旋するアガメムノン，下はカッサンドラを殺害するクリュタイムネストラだと解されている。出土品の中でも最も重要と思われるのが，黒い釉薬を塗った土器片である。これにはH]PAΣ EM[I(「我はヘーラーの物なり」)という文字が刻まれていた。この土器片およびヘライオンに捧げられたものとほぼ同型の女性小像が多数納められていることにより，テラスがヘーラー信仰のために設けられた神域だったことは間違いない。なお，出土した奉納品の地層と内容は，テラス建造の年代が前8世紀終わりごろで，全盛期は前7世紀だったことを示しており，岩室墓への奉納の始まりとほぼ同じ時期に建てられたが，同テラスにおける祭祀活動は岩室墓への奉納よりも長期にわたっていたことが理解できる。

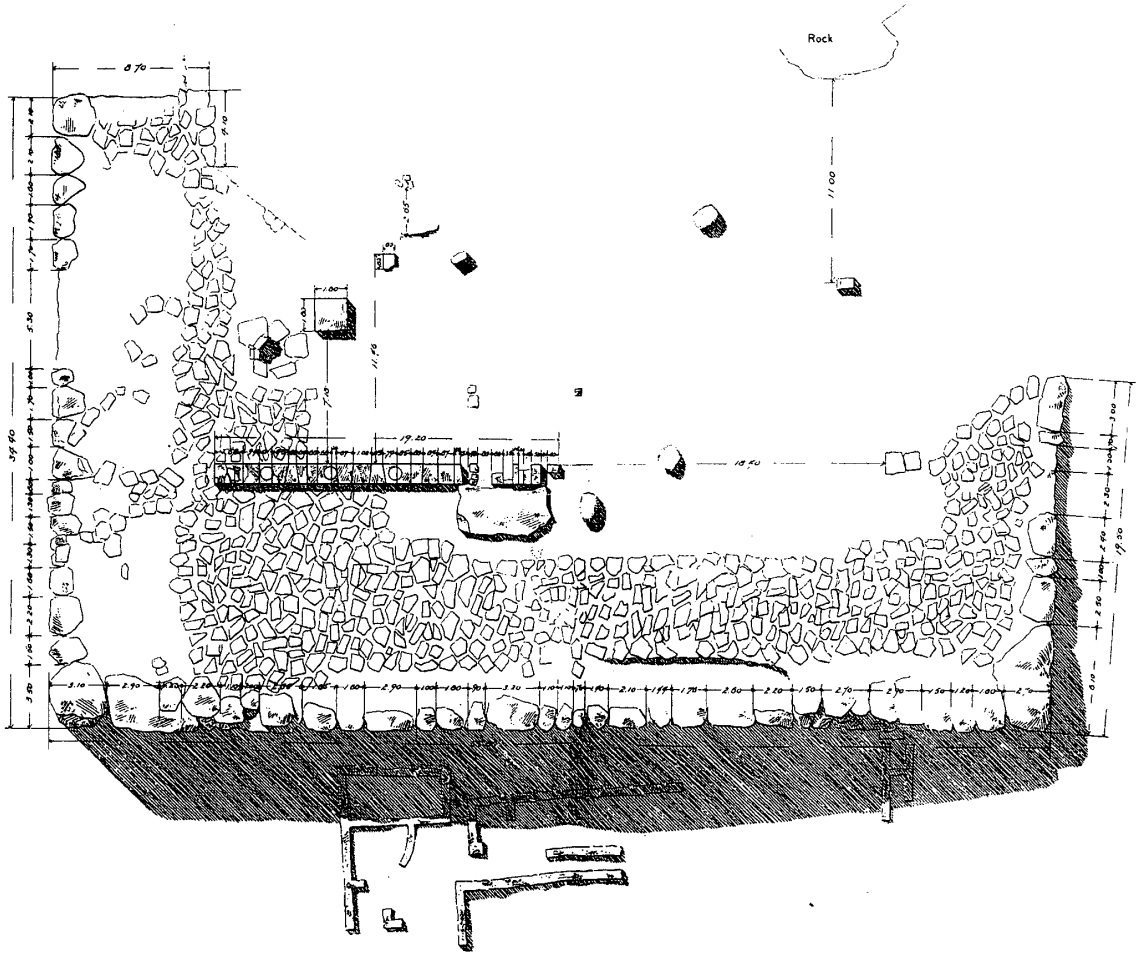
さて，このテラスからミケーネ時代の墓群を隔てて南東方向に700m余り離れたところのアクロポリスに，青銅器時代の集落跡が発見された。ヘライオンはこのアクロポ

〔図4〕 プロシムナのミケーネ墓群
(Blegen *Prosymna* II Plan 1)



リス南斜面に位置している。そしてヘライオンの最もアクロポリス寄りの場所に大テラスが建設された。テラスの外側に面した壁面には幅2.80mから3.20mの，長さが3.00mから6.10mという巨大な岩が使われ，上部表面は厚さ0.30〜0.50mの石灰石の敷石が敷かれている。このテラスの上に，ヘライオン最古の神殿が建立された。

この大テラスの建造年代についても，さまざまな意見が出されている。発掘者Tiltonは，ミケーネやティリンスの城壁と同じく巨石を使った建築様式（キュクロペス式）であるため，このテラスをミケーネ時代のものと判断している[40]。しかしBlegenは，彼が行ったテラス内外の調査で発見した土器片の大半がジオメトリック期に属すること，またミケーネなどの城壁とテラスの石組みの方法が異なることから，このテラスはジオメトリック末期の建造であるとの見解を示した[41]。これに対して，Plommerはジオメトリック期の土器片が地層に含まれていたのは石の隙間等から落ちた偶然の結果であり，テラスの石組みはキュクロペス式のそれと同じであると論じ，Tiltonの説を支持した[42]。



〔図5〕 ヘライオン大テラス（Argive Heraeum I Plate VIII）

テラスの建造年代に関して，注目すべきは Wright と Antonaccio の研究である。Wright はテラス上部表面に残る古神殿の基壇とテラスの石組みの分析を行って，Plommer の考えに反対した。彼はテラス上面の敷石の上に古神殿基壇の，高さ0.5mに並んでいる石列に着目してつぎのように論を展開している。この石列の上部0.2mが垂直に加工されているのに対し，下部0.3mは未加工のままになっている。これは，人に見える部分と地中に埋もれていた部分による違いであり，古神殿建立の際にはすでに土砂がテラスの上に堆積していたことを示している。一方古神殿の建築技術は，イストミアのポセイドン神殿およびコリントのアポロン神殿（前7世紀半ば建立）と，オリンピアのヘーラー神殿やテルモンのアポロン神殿（前600年ごろ建立）の中間に位置するものであるため，アルゴスの古神殿は前650～625年に建てられた。それゆえ，テラスの建造年代は古神殿のおよそ75～100年前（前8世紀後半）であると結論した[43]。Antonaccio も，テラスの建造がミケーネ時代以降のものであることは認めている。彼女は，Blegen の調査チームの一員であった Darbishire の手記に，テラス西外側に掘ったトレンチで見つかった路床と覚しき石の一群の下からジオメトリック期のものを中心とする土器片が出土したこと，またこのトレンチの最南部にあるテラスの基礎石の間からもジオメトリック期の土器片が出ていること，さらにテラスの巨石の間から，ミケーネ時代の土器とともに前7世紀のコリント式と思われる土器片が1つ含まれていたことが記されていたことを主たる根拠として，テラスは古神殿と同時期（前7世紀後半）に建てられたものと考えた[44]。

両者の分析は緻密であるが，その年代決定については，前述したように，ともにアルゴリスの歴史を捉えようとする中での解釈論から割り出されたものである。ここであらためて，これまでの研究者たちによる成果を挙げれば，①テラスの石組みがキュクロペス式であることについては甚だ疑わしいこと，②テラス内外の地層深くから大量のジオメトリック期の土器片に混じってコリント式土器もわずかに出土していること，③テラスと神殿の建設年代に開きがある可能性が十分にあること，④古神殿は前7世紀後半に建立されたこと[45]，の4点である。Plommer は①の疑問に対して反論しているが，基礎石の下からかなりの量のジオメトリック期土器片が出土したことについての十分な説明はできておらず，ミケーネ時代の建造であるとする彼の説は説得力を持たない。したがって②と③が，年代決定に重要な意味を持つ。しかし，②で得られたコリント式土器片は，テラスの完成が前7世紀にかかったことを示唆するものの，これをもって年代決定の材料とするにはあまりに脆弱であり，前7世紀後半とする Antonaccio の説も支持することは困難と思われる。また，③について，Wright は両建築物の開きを75～100年と推定しているが，この数字は憶測の域を出ないものであ

る。それゆえ，アルゴリスの歴史解釈に捉われずに，事実のみを客観的に眺めた場合，Blegen が観察した通り，前700年前後あるいはそれよりわずかに後という年代が導き出されるはずであろう。したがって大テラスは，小テラスや岩室墓における祭祀行為が始まったよりも，数十年後に建造された蓋然性が高く，また岩室墓での奉納が前7世紀はじめごろにはほとんどが消滅していることから，この地における祭祀活動（あるいはヘーラー信仰）の中心が，ヘライオンの大テラスに移ったものと考えて差し支えないように思われる。

大テラスが鉄器時代に入ってからの建造だとすれば，その目的は Wright の言う通り，ミケーネ時代のキュクロペス式の模倣にあったことは間違いない[46]。前8世紀末のおそらくアルゴスの人々は，ミケーネやティリンスに残されていた古代の城壁と同じ，壮大な規模の建造物をヘライオンの地に出現させようという思いに駆られたためである。規模の大きさに対する願望は，すでに小テラスの建設や岩室墓への奉納という形で現れていた。彼らは，MH期の小さな石棺墓を無視し，より大きな岩室墓に興味をもって奉納品を捧げた。また，さらに巨大なトロス墓の近くにテラスを作ってヘーラーのための神域を設けた。つまり彼らは「漠然とした古代」あるいは「古代人」ではなく，ミケーネ時代末期の大建造物に対して尊敬と憧憬をもって接したのであった。

IV 結　　語

以上，プロシムナとヘライオンにおける祭祀活動を見てきたが，その活動は古代の大規模な遺跡と係わりを持つものであった。では，なぜ古代の遺跡に関心が持たれたのであろうか。この疑問を解く鍵は，アルゴスのポリス成立と発展にあるものと考えられる。この時期のアルゴスは，貴族層が形成され貧富の差が歴然とするようになっていたこと[47]，また前8世紀末にはアルゴスの南東18km の地点にあるアシーネという町が破壊されており，おそらくアルゴスによる征服活動によるものであろうこと[48]，などが判明している。すなわち，ヘーラー信仰はアルゴスのポリス成立と対外膨張にともなって発展したのである。一方，近隣のミケーネやティリンスにはミケーネ時代末期の壮大な城壁や多数のトロス墓が存在していたため，過去の栄光を目のあたりにすることができたのに対し，アルゴスではそのような遺跡は残されていなかった。領域内に唯一存在するトロス墓の近くにヘーラー神域が作られた理由は，この点にあるものと思われる。すなわち，アルゴリスに覇を唱えようとするアルゴスが，自らのポリスの権威を高めようとした行為だったのではないだろうか。ヘライオンの大

テラス建造も，この延長線上にあるものとして位置づけられよう。いずれにせよ，当時のヘーラー信仰は，神の信仰に名を借りた古代崇拝の色合いが濃かったものと判断できる。それゆえ，プロシムナの岩室墓における奉納は，トロス墓近くのヘーラー神域における祭祀活動の副次的行為として規定できるかも知れない(49)。

プロシムナのミケーネ墓崇拝は，このようにアルゴスのポリスの成立および発展と係わりを持つ可能性が高いことがわかった。だが，両者の関係がどれほど緊密なものであったかを知るためには，前8世紀後半におけるアルゴスの事情をさらに追究する必要があることは言うまでもない。また，アルゴリス以外の多くの地域で，ほぼ同じ時期にミケーネ墓に奉納品が捧げられている事実は，ギリシア全体が歴史の大きな転換期を迎えていたことを想起させる。しかしながら，本稿ではこの問題に立ち入ることができなかった。ここではプロシムナのミケーネ墓崇拝がいかなる性格のものであったかを考察するにとどめ，上記の問題については別稿に譲ることとしたい。

註

(1) "Greek Renaissance"の定義については，A. M. Snodgrass *The Dark Age of Greece* 1971 Edinburgh 416-436; J. N. Coldstream *Geometric Greece* 1977 London 367-369 を参照。

(2) ミケーネ墓崇拝(および英雄崇拝)を全ギリシア的にほぼ網羅して検討を加えたのは，Coldstream (*infra* n.9) と Antonaccio (*infra* n. 17 Antonaccio IV) である。しかし，本文の中で後述するように，前者は墓崇拝と英雄崇拝を同一の存在とみなしているが，Antonaccio が指摘する通り，両者は区別されるべきである。なお，図1は Antonaccio IVの研究をもとに作成している。

(3) M. P. Nilsson *Minoan-Mycenaean Religion and its Survival in Greek Religion* 1950² Lund 516-538. 彼はこの中で，英雄崇拝の起源はミケーネ時代の王たちの墓に対する崇拝であるとし，歴史時代に入ると，その記憶はわずかに伝説として残っていたにすぎなかったが，一部の地域では彼らの墓に対する崇拝がずっと継続していたと考えている。

(4) L.R.Farnell *Hero Cults and Ideas of Immortality* 1921 (rep. 1970) Oxford 283f.

(5) R.K.Hack "Homer and the Cult of Heroes" *TAPA* 60, 1929 57-74. Hack は，ホメロスの中に英雄崇拝の描写がほとんど出てこないのは，ホメロスが，英雄たちの時代を同時代的に語っているためであり，鉄器時代の英雄崇拝はミケーネ時代から続く死者供養にホメロスが大きな影響を与えて発展したものだと考えている。

(6) G. Nagy *The Best of Achaeans: Concepts of the Hero in Archaic Greek Poetry* 1979 Baltimore 114-6; *Cf*. E.Rhode *Psyche: Seelencult und Unsterblichkeitsglaube der Griechen* 1921⁸ Tübingen Kap. 1.

(7) 一部の研究者は，前10世紀あるいは前9世紀にミケーネ墓における祭祀行為が単発的にあったとするが，たとえば Polignac のように近年の研究者のほとんどが，前8世紀後半にミケーネ墓崇拝が始まるものとみなしている。See Polignac (*infra* n.16) 163-66.

(8) J.M.Cook "The Agamemnoneion" *BSA* 48, 1953 30-68. Cook はスパルタのメネライオンとミケーネのアガメムノネイオン，またアッティカとアルゴリスにおけるミケーネ墓崇拝がほぼ同時期，すなわち前8世紀末に始まっていることから，これら一連の祭祀行為はギリシア本土に入ってきたホメロス叙事詩

の影響によるものだと考えた。

(9) J. N. Coldstream "Hero-Cults in the Age of Homer" *JHS* 96, 1976 8-17.

(10) Th.Hadzisteliou-Price "Hero-Cult and Homer" *Hist*. 22, 1973 129-144. 彼女はオリンピアでのペロプス，ミケーネのアガメムノン，ミケーネとイタカでのオデュッセウス等，各地でジオメトリック期から盛んに英雄崇拝が行われており，ホメロスはすでにこの事実を知っていたとして，英雄崇拝に対するホメロスの影響を否定している。

(11) A. M. Snodgrass "Poet and Painter in Eighth-Century Greece" *PCPS* 1979 118-130. 彼はホメロス叙事詩の影響を受けたと思われる壺絵は前700年以降であるが，それ以前から英雄時代の様子が壺絵に描かれていたこと，またキプロスで発見された前8世紀半ばの葬儀の形態がホメロスの描写と酷似していることなどから，Coldstream の説を否定した。

(12) A. M. Snodgrass *Archaic Greece* 1980 London 19-39. ただし，ラコニア，クレタ，テッサリアなどでミケーネ墓崇拝の風習が広まらなかったのは，これらの地域では自由な農民ではなく，農奴的存在が耕作していたためだとしている。

(13) Snodgrass (*supra* n. 12) が考える急激な人口増加は Morris によって批判されているが，Morris も前8世紀の人口増加を否定しているわけではない。I. Morris *Burial and Ancient Society: The Rise of the Greek City-State* 1987 Cambridge 23, 72ff.

(14) J. Whitley "Early States and Hero Cults: A Re-Appraisal" *JHS* 108, 1988 173-181.

(15) I. Morris "Tomb Cult and the 'Greek Renaissance': The Past in the Present in the 8th Century BC" *Antiquity* 62, 1988 750-761.

(16) F. de Polignac *La naissance de la cité grecque* 1995[2] Paris 163-170, Eng. tr. by J. Lloyd *Cults, Territory, and the Origins of the Greek city-state* 1995 Chicago

(17) C. M. Antonaccio "Terraces, Tombs, and the Early Argive Heraion" *Hesp*. 61, 1992 85-105 (以下 Antonaccio I と略記); "Tomb and Hero Cult in Early Greece: the Archaeology of Ancestors" in *Cultural Poetics in Archaic Greece* C.Dougherty & L. Kurke eds. 1993 46-70 (Antonaccio II); "Contesting the Past: Tomb Cult, Hero Cult, and Epic in Early Greece" *AJA* 98, 1994 389-410 (Antonaccio III); *An Archaeolgy of Ancestors: Tomb Cult and Hero Cult in Early Greece* 1995 Lanham (Antonaccio IV).

(18) Antonaccio IV 139-143.

(19) Antonaccio I 105, Antonaccio II 60f.

(20) Antonaccio III 398ff., Antonaccio IV 196f.

(21) 本文で挙げた他，とくに Calligas の説は一考に値する。彼は前10～前9世紀に'Lefkandi Period'と呼ばれる時代が続き，この時代に生きていた家族共同体の指導者たち（バシレウス）の行為をもとに，英雄伝説が成立した。この共同体は前830/800年ごろに突然消滅して，新しい共同体―すなわちポリス―が発生した。しかし，これらの英雄たちと係わりのある地域では英雄崇拝が流行した，と考えている。P. G. Calligas "Hero-Cult in Early Iron Age Greece" in *Early Greek Cult Practice* R. Hägg, N.Marinatos & G.Nordquist eds. 1988 Stockholm 229-234. なお，レフカンディのトゥンバに葬られていた戦士については，M. Popham, E. Touloupa & L. H. Sackett "The Hero of Lefkandi" *Antiquity* 56, 1982 169-174.

一方わが国でも，高橋裕子氏（「ポリス成立期のエレウシスとアッティカ」『史苑』57-1, 1996 50-71）が，エレウシスにおける墓崇拝から前8世紀のエレウシスとアテナイの関係を研究している。また，墓崇拝や英雄崇拝については，周藤芳幸氏（『ギリシアの考古学』同成社1997）や桜井万里子氏（世界の歴史

5『ギリシアとローマ』中央公論者1997）の概説は示唆に富むものである。

(22) 彼はプロシムナのミケーネ墓の発掘報告書を出した後，ミケーネ墓から出土したジオメトリック期の物についての考察，およびトロス墓近くのテラス等からの出土品についての報告を相次いで出している。*Prosymna: The Helladic Settlement Preceding the Argive Heraeum* I・II 1937（以下 Blegen I と略記）; "Post-Mycenaean Deposits in Chamber-Tombs" *Arch. Eph.* 1937 377-390 (Blegen II); "Prosymna: Remains of Post-Mycenaean Date" *AJA* 43, 1939 410-444 (Blegen III).

(23) Blegen I 133-135.

(24) Blegen I 110-116.

(25) Blegen I 112. Snodgrass は，この頭蓋骨をもって，ミケーネ墓の再利用だとしている。Snodgrass (*supra* n.1) 204.

(26) Blegen II 388-390. ただし彼は，この風習はミケーネ時代から続く英雄崇拝あるいは死者の祭祀の生き残りであると結論している。

(27) R. Hägg "Gifts to the Heroes in Geometric and Archaic Greece" in *Gifts to the Gods* T.Linders & G.Nordquist eds. (*Boreas* 15) 1987 Uppsala 93-99.

(28) Whitley (*supra* n.14).

(29) J. C. Wright "The Old Temple Terrace at the Argive Heraeum and the Early Cult of Hera in the Argolid" *JHS* 102, 1982 186-201, esp. 193ff.

(30) Antonaccio I. esp.103-105.

(31) Morris (*supra* n.15) 753.

(32) Blegen I 164-166.

(33) Blegen I 165. Blegen は，この壁龕がミケーネ時代からジオメトリック期まで続いた死者の祭祀の証拠であり，両時代の連続性を示しているとする。

(34) Blegen I 59-61.

(35) Blegen II 383. 岩室墓から出土した女性小像は，Tomb XIXから出たこの像のみ（Blegen I No.1051）であるが，ヘライオンで発見された多数の神像の1つ（*The Argive Hereum* —*infra* n.40— II 1905 36 No.187）の祖形とも思われ，Blegen は Tomb XIXの小像をヘーラー女神像だとしている。

(36) Blegen I 30-50.

(37) Blegen I 石棺の上あるいは外側に土器が置かれているケース（Graves I ,III,IV,X IV）が見られ，明らかに埋葬後の奉納と思われる。Blegen はこれを死者の供養が続いた証拠と考えている（Blegen I 38）が，出土した土器片はきわめて少なく，継続性を見てとることは困難である。

(38) Blegen I 30.

(39) Blegen III 410-427.

(40) L.Tilton "Architecture of the Argive Heaeum" in *The Argive Heraeum* I C.Waldstein ed. 1902 New York 109f.

(41) Blegen I 19f.

(42) H.Plommer "Shadowy Megara" *JHS* 97, 1977 75-83.

(43) Wright (*supra* n. 29) esp.186-192. *Cf*.H.Plommer "The Old Platform in the Argive Heraeum" *JHS* 104, 1984 183-4.

(44) Antonaccio I esp. 91-96.

(45) Antonaccio I 96-98 ; Wright (*supra* n. 29, 191). 彼は，古神殿以前に，テラス建造直後に祠が建てられたと考えている; C.A.Pfaff "Three-Peaked Antefixes from the Argive Heraion" *Hesp*. 59, 1990 149

-56.

(46) *Cf*. Antonaccio I 95. 彼女はDarbishireの報告をもとに，石灰石の化粧板がテラス表面全体を覆い，キュクロペス式であることは外見上わからなかったはずだとしている'‥one posssibility which emerges from Darbishire's account is that a limestone facing originally covered the conglomerate courses of the Terrace. If so, no deliberate imitation of Mycenaean cyclopean masonry was intended, since the conglomerate would have been invisible.'。しかし，もしそうだとすると，巨石が使われた意味を説明することができず，彼女の考えをストレートに受け入れることはできない。

(47) R.Hägg "Burial Customs and Social Differentiation in 8th-Cenury Argos" in *The Greek Renaissance of the eighth Century B.C.: Tradition and Innovation* R.Hägg ed. 1983 Stockholm 27-31.

(48) アシーネの発掘報告書は筆者未見（A. Frödin & A.Persson *Asine, Results of the Swedish Excavations 1922-30* 1938 Stockholm)。この第一次発掘により，アシーネは前700年前後に破壊され，以後ヘレニズム期まで無人状態にあったと思われていたが，1970年代前半の発掘調査でわずかながらアルカイック期や古典期にも人間が居住していたことが判明した（Sφren Dietz *Asine* II*: Results of the Excavations East of the Acropolis 1970-74* Fasc.6 B.Rafn *The Post-Geometric Periods* 1979 Stockholm)。ジオメトリック末期のアシーネ破壊は，パウサニアスの記述（II 36 4-5; IV 8 3)，あるいはヘロドトスの記述(I 82)から，アルゴスによるものであることはほぼ間違いないものと思われる。See L. H. Jeffery *Archaic Greece: The City-States c.700-500 B.C*.1976 London 134f.; Coldstream (*supra* n.1) 152ff.

(49) Blegen (III 412) は，小テラスがヘライオンの「境外の祭壇（'an outlying altar')」，Wright (*supra* n. 29 194)はトロス墓崇拝のための祭壇と考えている。しかし，この小テラスがプロシムナに作られた理由は，Wrightが述べる通り，ミケーネ時代のトロス墓や岩室墓が近隣にあったためかも知れないが，前8世紀終わりごろは小テラスがこの地域における唯一のヘーラー神域だったことは確実であり，ジオメトリック期からアルカイック初期にかけて各地に作られたRural Sanctuaryの1つだったものと思われる（Rural Sanctuaryについては，拙稿「ギリシア暗黒時代の神域―キプロスとの比較―『九州産業大学国際文化学部紀要』5 1996 97-112を参照)。また，最初期はヘーラー信仰と古代信仰が明確に分離されておらず，それゆえ小テラスと岩室墓への奉納は両信仰が混淆していた結果ではないかと筆者は考えている。